
パーカー エクスポート用品店

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーエクトスポーツ用品店

【Zコード】

Z0910F

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

少年二人は、ともに協力する部活仲間である。最近心が通い合っていない二人は、何気なく暮らしていた。でも、転校生が来た。その転校生の柏があまりにも勇敢なので、少年の一人の歌舞伎は少年の一人の梶田といつしょに備考をすることにした。その先にあったのがスポーツ用品店だった。

【プロローグ】

スポーツといえばどんなものがあるだろ？。

野球、テニス、サッカー、バスケ、ソフトボール、多様化するスポーツに光を当てるそんな商売をする秘密のお店があった。

パーフェクトスポーツ用品店……。

「おい、ヘイバス」

「あ分かつた」

「バスが回つていく、これはサッカーである。」

友人の梶田がやつてているスポーツ。彼は運動神経はいいんだ。それに比べて僕はあんまりでね。そんな生活が嫌になっている中学生。

「おい、カツチー、ボーッとしてないで練習練習」

「僕は歌舞伎 甲、特に特徴はない。あえてあげると、寝癖がひどいことかな。なかなか直んなくてさ。」

「聞いたか、この学校に転校生」

「ん？」

無口な僕は聞くことが楽しい。でもそんな生活が続くわけがなかった。

「その転校生は数々のサッカーの大会で優勝しまくってさ、そんでもつて頑張つたで賞みたいなのもいっぱい持つてるんだって。俺もいつかあんな有名人になりてー！」

「梶田ならなるよ。」

こんな会話が続くのもいまだけだ。ここから数々の試練にぶつかつっていくのだから。

今考えなければいけない課題は三つある。

その一、学校生活の勉強と部活の両立。

その二、転校生の素質を少しでも分けてもらひ。

その三、大会。

果たして僕は大会に出場できるのでしょうか。
帰り道、僕はこう考えた。もつと楽しくスポーツができるといい
のに、と。

そんなふと思つたことが実現してしまつとは。

一体どこのにあるんでしょう。不思議な不思議なお店。

スポーツの楽しさ

「スポーツなんてさ、できればやれるんだよ。聞いてる？」歌舞伎

「あつうんうん、それでそれで」

「だからさ、何でいつも宿題してんの？」

「しつかたないだろ、塾もあるんだから」

珍しく僕は怒鳴った。時間がある今のうちに宿題をやっておきた
いんだ。大会が近い、そんなこと分かってる。でも……言葉にでき
ない思いが邪魔をするんだ。勉強は学生の本分、でしょ？

「スポーツが嫌いになっちゃうよ！」

「分かつて、もう終わつたよ宿題」

「ではでは、せっかくだし、一対一でもしますか」「おう」

「一人の心にはサッカーによつての友情が舞つていた。つまり嫌い
なことでもどんなことでも好きな友達とやれるゲームなら樂しいつ
てことなんだ。

「なにに、その新しいドリブル」

梶田はそう語りかけてきた。

「実は昨日考えたんだ、教えてあげよつか

「いいよ」

「いらないの『いいよ』だつた。

「」のドリブルの仕方は前後に足でボールをはさみクイック
をせるとこ、目立ちやすいスタイルでした。特徴のあるキックも

できるけど、それは転ぶよ。

梶田のうまさはオリンピック並みだ、でも一いつ氣づいた。彼にはサッカーに対する重要な部分がないと。

それをうまく伝えたかった、だから僕は本気で偉そながらサッカーを教えてやることにした。

「本気で行くから」

「カッチーもセンスあるね、俺も本気出すよ」

こんな一人の時間がずいぶんと流れた。先生も感心してみていた。一人がこんな世界のこんな場所で頑張っている、それを見ていた僕たちのライバルは確かにこういった。

「負け犬の遠吠えなんて悲しいぜ、雑魚」

どこかでそんな思いがはじけると、なぜか時が経つのが早かつた。

「さあ、もう遅いし帰ろう」

「俺も帰ろう」

僕の夢はサッカーをもつと楽しみたい。明日もあさつても。

転校生の伝説

「転校生の柏 日次君です」

「どうせ僕なんかが出る幕なんてありませんよ
暗いなあ。でもどんな奴か分からぬいや。

「そこの席どうぞ、柏君」

えー僕の隣?

「よろしく」礼儀正しい。回りに挨拶をしていく。

僕も軽く会釈した。

そういう日々が過ぎ、転校生に伝説ができる。それはスポーツ界の革命的な出来事だった。

「ガンツ」

「うつ」

転校生は練習中、普段は目立たない生徒に足を蹴られた。もちろんスパイクで、僕は見ていたので、手当てに行くと。

「マネージャーじゃない人は引っ込んでください。これは僕の戦いです」

そう言って練習を再開すると、見事にショートを決めたのだ。血まみれの足で。

もちろんその足じゃ大会には出られない。でも彼のしたことは革命的だった。

その後、僕と梶田は『柏君とお友達にならう大作戦』を実行することを決めた。

尾行していると、ある店にたどり着いた。

「パーフェクトスポーツ用品店？」

はじめて見るお店だ。

「不思議な商品あります？」

中に入つてみると、

音楽はずいぶん昔のロックだ。イメージはそんな感じ。

スポーツの店だけあって品揃えはよく、あらゆるスポーツ、カヌー、卓球いろいろだ。

「お店によつこつ……」

勢いのある来店挨拶は、衝撃とともに止んだ。

「この店はどんな人でもつスポーツのつプロになれる店つですよつ続行することに決めたらしい。

「柏君だよね、女装するなんてとつても似合つてる」

「そつそつ、うわーこんなスポーツ用品店に一回きてみたかつたんだあー、ハハ」

「つけてきたのなら、帰つてもらうといふですが、店も用があるようなので特別に中身をお見せします。では、どうぞごゆつくづ」

柏君の新しい姿が見れた気がした。小さなことだが、……。
もう終わりかい？ 終わりならエンディングを。

これからスポーツ界の革命のようなものを見て欲しい。
パーフェクトだけあって格段にプレーがきれいになるらしい。

そんな店をみなさんも見つけてください。

よつこそ、
パーフェクトスポーツ用品店！

「プロローグ」（後書き）

スリルを書けたと思います。スポーツの楽しさが分かってくれれば何よりうれしいです。

【悩み解決】

「IJの店にあるものはどんなものなんですか？」
「いい質問だね、実はその名の通り運動能力をアップさせる商品が
ずっと並んでるんだ」

そのこと以外に気になったのはありとあらゆるスポーツ用品にこの
店独自のブランドがついて回っていることだ。

「ドーピングですか？」 梶田がいい質問をした。

「ここだけの話ですが、これらの商品はつぼを利用して運動神経を
あげているんです」

「へえ～」ナン君のキック力増強シユーズみたいだなあ。

「ちょっとはかせてよ」

「いいですよ」

梶田は好奇心旺盛だな。まつ僕が冷静なだけか。

「なんか動きづらい」

「ねえ、そろそろ帰るわいよ。楽しみは後でとつておこうわいよ。今日は

梶田の苦手な社会のプリントがあるじゃん」

「そうでしたそうでした。またくるぜ柏！」

梶田も素直な性格だな。

「君たちと会えてよかつたよ」

「いらっしゃ」二人同時に言つた。

「ハハハハ、面白いそのネタ、ツハハ」

「確かに自分でも笑えるハハ」

今日も帰り道で楽しく笑うことができた。でもそんな日々は長く
は続かないのだろうから、もっとまじめに生きていればよかつたと
後で後悔していた。

家に着いた。なんとなく面白いテレビがはいればいいなと思つて

いた。

「カツチー、おやすみ」

「じゃあな、ヤツチー」

弟の矢吹^{やぶき}だ。

どうしようもない弟だけど挨拶がしつかりできるいい奴だ。
このまま和やかな家族でいれればと思つ。

「プルルルル」携帯が鳴る。

「どうした梶田」

「まさにミラクル大逆転ツーランホームランだよ」

「お前、サッカーが趣味じやねえーのかよ」

「そんなこと関係ねえ」

「はいはい、見ますよ」

「プチーン」

「おもしれー」

「だろ」

「野球のスリルも学びたいよな、あのスポーツ用品店で」

「不思議な店でならできるかもね」

「そうさつてサッカーだろ」

「意外とサッカーにこだわるねカツチーも」

「サッカーはシユートを決めろ!、シーコーゼン」

翌日

明日からは楽しい連休、でも勉強をしなければならないという重
圧感が僕を襲つていた。

「そんな怖い顔してたら運氣が逃げちゃうぜ」

「梶田ー」

「まっすぐ前を向いて、部活に取り組もうぜ」

「その言い方が嫌だから宿題」

「本当にめんどくせがりやだね、君も」

「悪いか」

「悪いよ

その後僕は一人で部活をサボリスポーツ用品店に行つた。ここなら僕の心が分かってくれる人がいるかも。

「いらっしゃい」

出てきたのは駄菓子屋にいるようなおばちゃんだった。

「スポーツばあちゃんじょよ、スポばあと呼んでおくれ
チョコバーみたいでおもしろかった。

「実は……」

「わかつとむ、その体格からしてあまり運動に向いてないのじゃろ

う

「はい」

「そんな体格じゃ体に負担がかかるのも無理ないのう」

「僕はどうすればいいんですか。本当は部活がしたいだけなのに」

僕は泣いてしまった、涙ぐんでしまった。

「アンチベルトを授ける」

「アンチベルト？」

「それが君のスポーツを可能にする装置じゅうしき」

バックトゥーザフューチャー風だった。

涙を拭いて僕は練習場に向かった。
はじまるんだ、スポーツバトルが。

【悩み解決】（後書き）

楽しければいいですね。
はつきり言って友情の大切さが分かります。
はじめてまして、青い絵八代の小説を評価してやってください。楽し
みです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0910f/>

パーフェクトスポーツ用品店

2010年10月9日23時15分発行